

## 受け継ぐもの 田中 時義



2013年、春一。

▶始業式、今日、皆さんはひとつの節目を迎えました。

連続して流れる時間の中で、私たちは、何かを実感するために、その時々立ち止まり、考える。今日のこの始業式という節目にあって、みなさんに考えてほしいことが、ひとつあります。

それは、皆さん一人ひとり、自分の未来の姿、これからの夢を、もう一度見つめてほしいということです。

この横浜緑ヶ丘高校は、90年を迎える、伝統ある高校です。私は、「伝統」というのは、単に時が刻まれ、年月がたったということだけではないと思っています。伝統というものは、極端に言ってしまえば、「いのちのリレー」、「こころのリレー」、その積み重ねだと思えます。そのとき、そのときに、生きた人々の営み、それを次の人々にバトンとして渡していく。

もちろん、バトンを受け取る者は、前の走者とまったく同じ営みをするわけではありません。バトンにこめられているのは、「こころ」であり、「願い」であると思えます。その願いをうけて、今の私たちが、どのように、自分を生かして生きていくかを考え、実践していく。そのつらなりが伝統であると思えます。いのちのリレー、こころのリレーは、一人ひとりの、自分という人間の中にもあります。今、皆さんは、去年の自分から、バトンを渡された、今年の自分です。そのバトンを受け取って、今年をどのように駆け抜けるか、学習に、部活動に、さまざま人とつながりに、社会とのかかわりに……。

▶そして、その今年の営みが、次の年の自分にリレーされていく。



今日、この始業式という節目に、連続して成長していく、自分の未来の姿、今の自分からバトンを受けて走っている姿、自分の夢を、もう一度、思い描いてほしいと思います。未来の自分に、今の自分は何をつないでいこうとするのか、考えてほしいと思います。

その未来の姿を実現するのは、まぎれもなく、今バトンを握っている、今の自分です。自分が握っているバトン、そこに、より高く、より熱く、よりやさしく、その思いをこめるために、この一年、皆さんが、自らの活動を充実させてくれることを期待しています。

私も、皆さんの思いを直接受け止めていきたい。校長室の扉が開いていたら声をかけてください。皆さんが校長室に足を運んでお話をきかせてくれることも願っています。

横浜緑ヶ丘高等学校に赴いた最初の始業式に、こんな話をさせていただいた。思えば、新設校ばかりを歩んできた自分が、最後になって伝統のある学校に。その時、「伝統とは何か」ということを、私なりに真剣に考えていたと思う。あれから十年、百年を迎える牧陵の学び舎。そこに繋がれている多くの人々のバトンに思いを馳せながら。

#### Profile

平成25年より4年間 校長として在任。創立90周年にあたり、新校舎に校史資料室開設、生徒作成の冊子「牧陵」の再復刊に寄与された。

